

沙英からヒロさん（ひだまりスケッチ二次創作その3）

陽ノ下光一

「うーん……たかだか数文字……なのになあ」

紙の上でシャーペンの先を何度も踊らせては、その都度溜息がもれる。部屋の主は、スレンダーで長身、メガネが理知的な雰囲気を出している少女。紙には「進路調査票」と印字されていた。

「沙英ー、ごはん出来たけど、どう？」

ドアの向こうから、優しくおっとりした声がかげられる。彼女の隣室、101号室のヒロだ。

「あつ、うん、ありがと。すぐ行くよー」

言って彼女は、進路を決めるといふ目の前の「宿題」を一旦脇に置く事にして立ち上がった。

「今日は献立なにー？」

102号室のドアが閉じられた。今日も「進路調査票」は白紙のまま机の上である。

沙英が住むアパート「ひだまり荘」は、道路を挟んだ向こう側に「私立やまぶき高校」があるロケーションである。高校には美術科があり、彼女もその生徒である。

アパートは全6室で、1年から3年生まで各2名ずつが親元を離れて生活している。互いに足りないものを補

う形で、自然と家族的な雰囲気の影響を持つようになつていた。その一方、ひだまり荘に住んでいると話すとして、「あのひだまり荘」と言われるほど知名度が高い。その意味するところは、「奇人率が高い」というものだ。

沙英と隣室のヒロは互いに3年生であり、他4名の下級生からは慕われ、何かと頼りにされていた。

美術科の生徒なのだから、普通科の生徒に比べれば進路の悩みは多くは無い……というのが、おそらく一般的な見解だろう。美術に関する専門学校なり、大学なりを志すのが大多数。高校の段階で、自らの専門とするものを決めた子たちが多いのだから、当然そう思われるはずだ。

ところが、沙英に関しては少し事情が異なっていた。

「ふふ、今月号の沙英のお話も、素敵だったわよ」

食事の最中にそう言ったのは、沙英の正面に座る、癖の強い髪を左右でお団子にしている少女。表情も母性的な優しさに満ちている。

「そ、そう。あ、ありがと」

理知的に見える少女だが、沙英は誉められる事が得意ではないのか、照れている様子。彼女は高校生でありながら、プロの小説家であり、橘文というペンネームで活躍している。

その小説家であるという点が、彼女の進路について悩みを投げかけていた。

「甘い恋愛話だったわね。沙英の実体験かしら？」

「こそ、そう。うん、じ、実体験無しには書けないというかさー、あの描写は」

慌てふためいて応える沙英に、ヒロはくすりと笑っている。沙英のところには不思議と恋愛物で執筆依頼が来るのだが、いかんせん沙英には異性とのお交際経験などなく、実態はただの耳年増である。強がりな性格なのか、周囲から恋愛に関する話を振られると、交際経験豊富であるかのように語ってしまうのだが、なにせ本人が正直な性格のため、態度で嘘がバレバレなのである。

「と、今日さー。ゆのと宮古、それに乃莉も来て、昔のノート見せたり、小論文の話をしてたよ」

話題をごまかすというわけでもないが、沙英は、その日の後輩達との出来事をヒロに対して語り始めた。3年生というだけではなく、彼女がプロの小説家という事もあるのか、後輩たちは「大人でカッコいい頼れる人」と、何かと沙英の下を訪ねてくるのだ。

沙英自身も、後輩たちに対しては出来るだけ「お姉さん」ぶっており、頼りになる人間を演じている。ただ、ヒロの前では自然体になれるのか、彼女と2人きりの時だけは「普通の高校3年生の女の子」になれるのだ。

「へえ、じゃあ今日は、ずっとお勉強会だったのね♪」

沙英自身が学業と小説家の仕事で多忙を極めるため、

彼女は隣室のヒロの厚意に甘える事が非常に多い。この日のように、夕食を作ってもらい、一緒に食べる事が多い。また、身の回りの事に関しても、ヒロの方が献身的な位に色々してくれる事が多く、健康面まで気を遣ってくれている。

そのようなものだから、周囲や後輩達が抱いている、彼女達の関係性は「夫婦。沙英さんが夫で、ヒロさんが妻」というものだ。

ともかく、そのために沙英の料理の腕前は、1人暮らしであるにも関わらず、それ程高いレベルではない。

以前、珍しく、ヒロと喧嘩をした際に、沙英が仲直りの印に、ヒロの分の弁当も作って来たことがあるのだが、それを見た後輩の宮古からは揶揄されたものだ。

「せっかく仲直りしたのに、またケンカになっちゃうよー？」

クラスメイト曰く「上手くないけど、下手でもないよね」レベルなのだそうだ。

これらの事は、この2人が単なる友人や、隣室同士、クラスメイトであるという関係性を越えて、固く良好な人間関係を築いている事の証である。

そういうわけで、沙英はヒロに対しては、後輩達に接する時とは異なり、気取らずにいる事が出来る。

「ゆの達には勉強とか、色々頼ってもらってるけど……私自身、自分の進路とか決めかねてるんだよね。みんな

が思うほどには、かつこよくもないんだよね、私」

後輩たちに対しては見せない本音、弱音をヒロに対してだけは吐き出すことが出来た。ヒロはこういう時、柔らかな笑顔でそつと背中を押してくれるのだ。

「沙英の悩みは素敵な悩みだもの。そんな沙英も含めて、みんなから頼られているのよ」

沙英は思わず頬をかいてしまった。自分が2年生だった時にも、同じようなやり取りをした記憶がよみがえったからである。

自分が2年生だった時、後輩のゆのを街中の書店で見かけて、声をかけた時の出来事だ。

「沙英さんは、何探しに来たんですか？」

と、ゆのに聞かれた。その日は、沙英の作品が載る月だったので、こう応えた。

「んー、文庫の新刊……と……」

そこでいったん言い淀んで、続けた。

「……つとね、赤本……見に来たん」

「赤……ちゃんの本？」

ゆのが首を傾げて聞き返すと、沙英は赤くなってしまう声も張り上げてしまった。

「ちっ……がう！」

沙英はとにかく色恋沙汰が絡む出来事については、必

要以上に神経質になってしまおうだった。

その後、ゆのを誘って喫茶店で雑談をした。お洒落な店、ゆのは最初、緊張した面持ちだったが、沙英は「このお店、好きなんだ」と言つて、エスコートしてみせた。

「……あの、さっき買った参考書って……文系でしたよね？ 沙英さん、文系の大学に行くんですか？」

ゆのはエスプレッソの小さな器に砂糖を2本も注ぎ込みながら、そう尋ねてきた。尋ねられた沙英は、少し困り顔でこう応えた。

「実は美術系目指すか、文系目指すか悩んでるんだよね。そろそろ時期的に悩んでる場合じゃないんだけど……」

言い淀んだところで、ゆのからの言葉が沙英の胸にざつくりと刺さった。

「……甘い……甘すぎです」

「だっ、だよね！」

ゆのは単にエスプレッソに砂糖を入れすぎたため、口にして甘いと云ったのだが、沙英はタイミング的に別の意味で捉えてしまった。

沙英が進路で悩んでいる理由は、実に悩ましいものであった。それは、彼女がプロの小説家だからだ。

「……文系に進むべきだってことは、わかってるんだ」
彼女はゆのにそう応えた。沙英は元々、自分の書いた

小説には、自分で挿絵を描きたい。自分の表現したいも

のは、自分でしか表現できないから……と言う理由で、やまぶき高校の美術科に入った。2年生になってからの選択強化授業も「平面」を選んでいるのはそのためだ。

ただ、美術を勉強する内に、その面白さも分かってしまい、文系大学か美術系大学か……どちらに進むべきか、勉強すればするほど、仕事をすればするほどに悩みが深まってしまっていた。

「どっちも半端になるから、良くないってわかっているんだけど、どっちも選びたくて……」

美術も本格的に勉強したいし、小説家として本格的に文系の勉強も大学で行いたい。彼女は2年生の時から、このジレンマにさいなまれていた。

「だいじょうぶです！ 要は『二兎追う者は、一兎も得ず』ってお話ですよね！」

「うー！」

後輩にズバリ言いあてられて、思わず頭を撃ち抜かれた気分になった。

「お姉さん気取りでエスコートしたのに、情けないとこみせちゃった」

その日の夜、いつものようにヒロの部屋を訪ねて、沙英は後輩とのやり取りに付いて語った。ヒロはその時、彼女の背中をしっかりと支えてくれた。

「情けなくないわよ。沙英の悩みは大事で素敵な悩みだもの。ゆのさんも、そう感じたと思うわよ？」

そんな記憶が昨日のようによみがえる。あの時は2年生だったが、今は3年生。進路はもう決めなくてはならない。

美術系大学へ進んで、もっと美術を極めるか。それとも、文系大学へ進んで、本業である小説家としての自分を研鑽すべきなのか。ゆのに悩みを話した時のように、今でも同じ事で悩んでいた。

今日も、ヒロは1年前のように自分の背中をそっと押してくれていた。

「文系か美術か……あれから1年経つのに、まだ決められないなあ」

そう漏らした沙英の前に、ヒロがコーヒーを出してくれた。砂糖とミルク入りの甘いコーヒーである。

「ヒロー。ヒロはもう決めた？」

沙英は目の前の親友にそう尋ねた。進路調査票を出さなくてはならないのは、彼女も同じことだ。

「私は……美大かな」

「そっか、そうだよなー」

美術科に入った以上、ほとんどの生徒の進路は決まっているも同然だ。自分の好きな美術をさらに高いレベルに持っていきたい……そうであるはずだから。

「美大に行くか、文系の大学に行くか……もう決めない

といけないのになー」

ヒロが淹れてくれた甘いコーヒを口にして、ため息。もう高校生活の残りは長くない。そろそろ決断の時だ。

にも関わらず、彼女の悩みはなかなか尽きなかった。小説家として文章を書く面白さはよく知っている。でも、絵を描く楽しさを高校で知ってしまった。どの進路が最も自分に相応しいのか。

「うーん……文系を選ぶべきなのは、わかっているんだよね……」

沙英が思わず漏らした言葉に、ヒロの顔が一瞬曇った。

「ん？ ヒロ、どうかした？」

「あ、ううん。何でもない」

沙英が聞くと、ヒロはいつも通りの笑顔を浮かべている。沙英は進路について、あれこれ思いを巡らせている内に、もう1つの事にも気が付いた。

文系大学を選べば、ヒロと異なる進路になるという事だ。

そう思うと、さらにもう1つの事に気が付いた。

「3年生か……」

沙英は思わずつぶやいた。

夏の陽気に変わりつつある今。修学旅行も終わり、やまぶき高校での生活は、終わりにさしかかろうとしている。それは同時に、この「ひだまり荘」を出るという事であり、後輩達やヒロとの生活にも終わりが訪れるとい

う事だ。

ある意味、進路の悩みと同レベルに、これは悩ましい事でもあったかもしれない。みんなが楽しく過ごせる空間は、その場では永遠のように思えて、実はそうではない。そういう事だ。進路の決断とは、そういうものも含めたものなのだ。

次へと踏み出すステップには、出会いがあれば別れもあるのだ。

「大丈夫よ、沙英」

思い悩んでいるところに、ヒロの声がかけられた。その表情は、かすかな陰りもあるように見える。そうだ、ヒロだって私と同じような思いを持っているはずなんだ。でも、沙英は自らの進路を決めかねていると同時に、1つの真実らしい思いだけはあった。

「そうだね、うん。ありがと、ヒロ」

この親友との関係や、後輩達との関係は、きつと、高校を出た後も続くのではないかという事。形は変わっても、より固い何かで繋がりが続けるだろうという確信を持っている。

「ごちそうさま。おいしかった♪ 流しに置いていい？」

「ありがと。適当に重ねちゃって」

沙英が2人分の食器を流しへと運ぶと、途中の冷蔵庫の張り紙が目に入った。ヒロの字でメモ書きがされている。

「……ヒロの字って、優しくていい字だよね」

「えっ？ 何？ 急に……」

照れる様なヒロの声が聞こえる。字は体を表すと言うけれど、ヒロのそれはやっぱり彼女の優しさをよく表しているように、沙英には思えた。

沙英は思う。ヒロみたいな優しく思いやりのある人が、教師だったらと。将来彼女がそのような進路を選んだら、ヒロが自分の背中を優しく押してくれていたように、自分も押してあげようと思った。

「ん、見たまんま言っただけだよ」

「もう、沙英だったら……お世辞言っちゃって」

ヒロと話をしていると、やっぱりこの時間が永遠のように思えてしまう。こうしてまた、今日も沙英は進路調査票に、この先の記事を先延ばししてしまうのだった。

遠くない先に決めてしまうのだから、今しか過ごせない、この親友との空間を共有する事の方が、大切に思える沙英であった。

【完】